

本教神理大要  
完

特35

762

014614-000-9

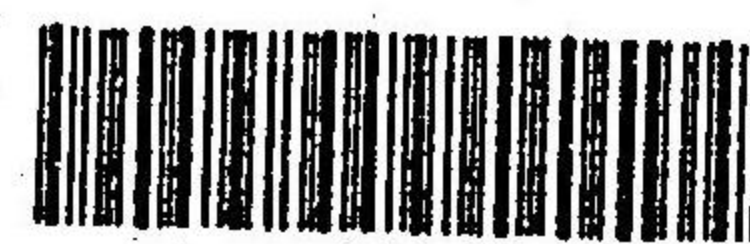
特35-762

本教神理大要

津田 常名/著

M24

ABB-1043





伊弉册命の著書本宮神理大要二集

よるんていさなるのさうまはふ感す神理の

外を古來說ふりては極も説き

りまれは極を中してこれとけんを

廣大らんとしこれとけんを即廣



たりまれいさのまか廣大らんとするのさうまはふ

あぬ人責の神理のさうまはふ日本その

神理を知りて人責とすも國より人その神理の廣



大なるおぼへてこれと受用する人の心  
 と受用する人の心と受用する人の心  
 と受用する人の心と受用する人の心  
 と受用する人の心と受用する人の心  
 と受用する人の心と受用する人の心

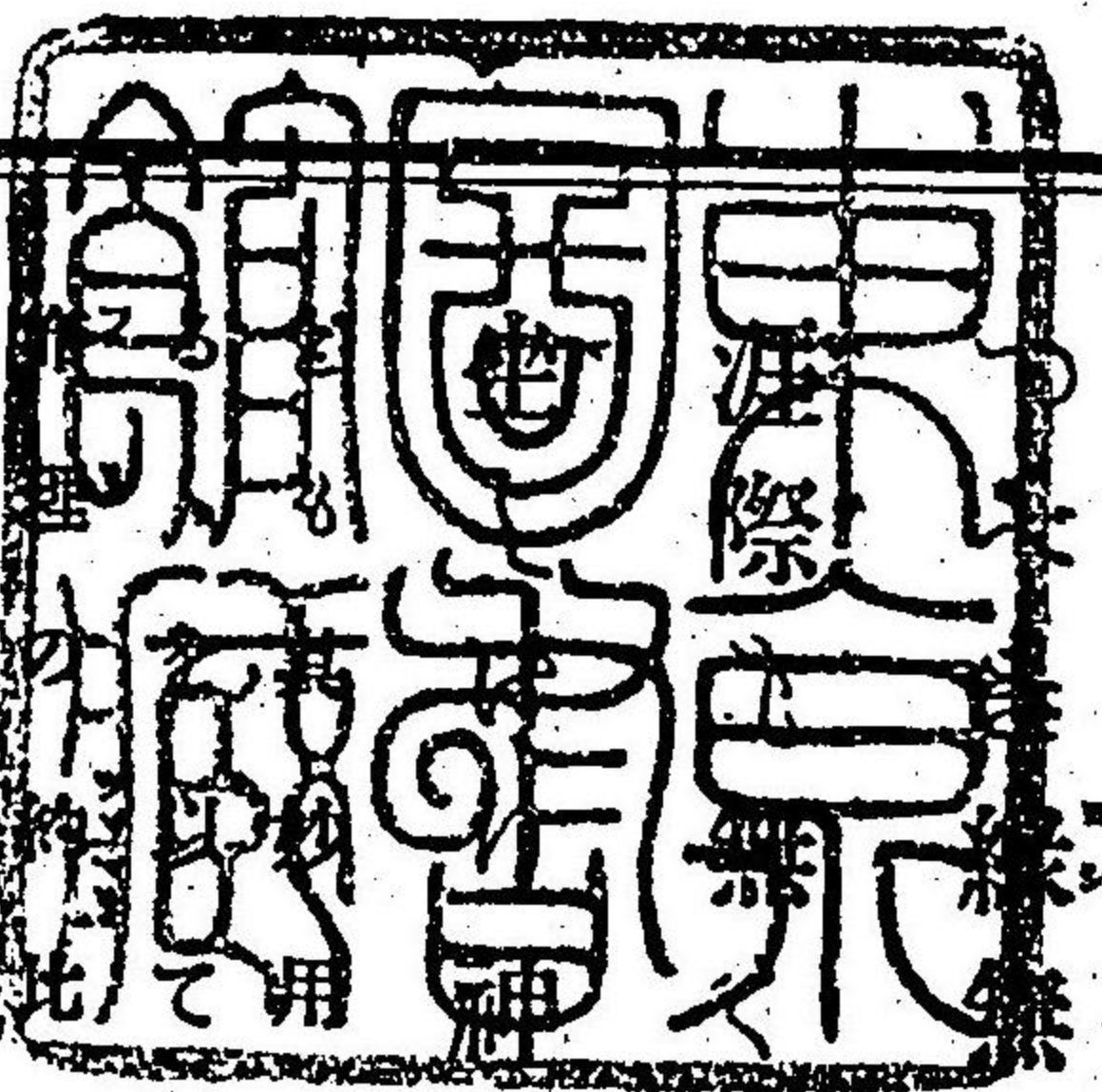
福の美事

明治廿四年九月

元三石老人 福の美事

本教神理大要

津田常名著



古天地のいまだ生らざりし以前には固より年序の立

ければ其始と云ふべき時も知られずはた

限も無き甚幽玄なる位に唯一靈のみ大在

語に比といふ是なり 靈は眼に視耳に聴き

自在なる神の具れる理のみは確に察ら

たり 此の靈や無上至尊の大元靈なるが

靈の靈たる神識の勃々として活動おむとするも其力

と發すべき機を得ずして遠永く潜まりたりけむとい



つしめ自然分れて男徳の一靈と成坐し又分れて女徳の一靈と成坐しけり如此本靈の他に男女の二分靈相對ひて女靈は男靈の剛にして立ち通る性を感覺り其と摸せる表象の牟良々々牟禮々々と群りて經成せるものを得給へり所謂多賀美なり多加は立ち通る義に同語の轉なり美は群る多加は立ち通る義に義にして牟里の約なり男靈は女靈の柔にして居り迎ふる性を感覺り其と圖せる表象の牟良々々牟禮々々と群りて緯成せるものを得給へり所謂加牟美なり牟加は居り迎ふる義にして唯また獨の加牟被の加夫な牟加皆同語なり屈も加牟々々の約にして此義の轉には非牟加じか美は既これぞ虚靈不味の靈に對して美と稱ふ物牟加に言へり

質の發生し根元にして天地萬有と結ぶべき造化の二大元子なりける故美とは浮氣流動固形の體を論はず凡て五官に觸れ或は器械以て測らるゝ限の物に汎く渉る稱と爲りて眞及實などの字を填用ひ眞の反なるる空などの字を牟那志と訓むは眞無見は此眞より出眞の反なるる義にして美を牟といふは例なり

此は夢は寢眞得の義なり草木の芽も眼に觸るよりはまた品物の體を眞といふ要たるものを別て眞と稱へり其は植物の枝に對して幹を眞木といひ花に對して葉を眞と稱ひその葉の中にても骨に對して肉を眞と云ひ又劍戟などの柄に對して刃を眞と呼ぶ類なり按ふに靈は幽にして見るべからざるを眞は顯にしてあづから確實の意あれば其



意の一轉して主要たるもの如斯經眞は女靈に顯れ緯にいふ言となれるなるべし  
 眞は男靈に顯るれども大初の三靈は其御徳一にして  
 三々にして一なる妙理幽契存りて靈感相通ふに依り  
 二大元子の薫りあへると互に彼眞得たりと快がらせ  
 給ひし彼眞得約りて天てふ稱の原となれり阿米の阿  
眞得の約なりこの多加美加牟美の經緯編成せる状よ  
り編字の義と爲り阿麻牟阿美阿牟阿米と活用き剛てよ  
ふ品名も是又高天原といふは天の眞の長く充滿瀾  
より起れり  
 繪り散在る義なり此眞の散在る境界のいと茫々なり  
開畫廣などに轉りて原張暗道さて其無上至尊の本靈は高  
 天原に假の神體を現し次なる高皇産靈神に觀え給ひ

て阿米廼美奈加廼宇志と曰ひ宇宙の主靈たる不生不  
 滅の御徳と大御口づから教給へり是神の最初天之御  
 中主神にして其御教は言語の淵源天津祝詞の太祝詞  
 事の本教なりけり神は假體の省略にして假此御名義  
 御は借字にして眞なり那加の那は本居大人の那流と  
 云言に三の別あり一には無りし物の生り出ると云人  
産生を云も是なり神の成坐と云は其意なり二には此物のかは  
 りて彼物に變化と云豊玉比賣命産坐時化八尋和邇た  
 まひし類なり三には作事の成終ると云國難成とある  
 成の類なり此三の差によりて漢字は生成變化などい  
異あれども皇國の古書には訓の同じきを



ば通用ひて字にはさしもか  
 かはらざることも多し云云  
 と説れたる生成化の本言  
 加は所の義にして在所住所  
 などの加に同じく生成化  
 の理の行はるゝ所といへる  
 なりこの那加に二義あり  
 て其境界を廣く稱ふ那加と  
 其中心を狭く指す那加と  
 是なるが中、字にも亦此二義有れば後にまづ宇宙と世  
 の中と云ふは大凡眞の在る  
 限は所として造化神理の  
 行はれざること無ければ即  
 化所なりまた國を總稱ひ  
 て國の中海と總稱ひて海の  
 中山河なども山の中河  
 の中と言ふは國の國たり海  
 の海たり山の山たり河の  
 河たる各その極端より極端  
 に至る化工妙用の同一を

る限と云へるにて其意は少  
 も變ること無し然ると大  
 祓詞に四方之國中登大倭  
 日高見之國乎云云とあると  
 始め一境界の中心を指して  
 も中と稱へるは其境界に  
 行はるゝ神理の焦點にして  
 傾かず偏らざる位地なる  
 より生成化の本所てふ義なる  
 べし君臣の中父子の中  
 夫婦の中兄弟の中  
 の生成といふのふ義にして亦  
 化所なり奇しきも妙  
 なるも森羅萬象此生成化の  
 幽政を漏るゝもの無く  
 日月星辰は生て成たるが現  
 今の在かたにしてかく  
 上は又化て生るべき理灼然  
 けれども其は何時なるか  
 りといふことは凡智を以て豫  
 測知るべからず其間  
 に孕るゝ物の盡その生出る  
 より漸々に成ととのひぬ







如くなれば武須<sub>毘</sub>の<sub>毘</sub>も神號の義高皇は借字にして  
 其一なることを辨ふべし  
 經眞なり産は正字にして宇牟須の省なる由平田大人  
 の説の如しされば經眞と持分けて千萬の品類と産出  
 す靈なる神と負せ奉れるなり次に女徳の分靈假體と  
 現れ坐せり神皇産靈神是なり御名義神皇は借字にし  
 て緯眞なり産靈は男徳の神に同じされば緯眞と持分  
 けて千萬の品類と産出す靈なる神と負せ奉れるなり  
 此皇産靈二靈の持分坐せる元子の經緯成す相交錯る  
 幽政と天之御中主靈鎮座次第多賀宮の條に天之御  
 中主靈貴とあるは欣感しき御名  
 思にして正傳との夫之眞化所之張引と主宰坐す大御稜

威に因りて長久き世を歴る間に天の眞は大虚中に寄  
 りしよりて其形状言ひ難き一物と混成れるが變化不  
 測の徳用を呈してろの一物より葦牙の發生るが如く  
 して燃騰る質あり此時男徳高皇産靈女徳神皇産靈の  
 御魂相感けて始めて靈男神靈男とは現體を具へ給は  
 るを後に神にも人に宇麻志阿志訶備比古遲神と産  
 給へり御名義宇は上天之御中主神に言へる宇志の宇  
 にして外に張出す力なり麻志は令放なるべし麻は尿  
 放尿放  
 戸里なの里を省きて尿戸といへるが如し阿志訶備は葦  
 牙と記るもありて狀如葦牙てふ譬に出たり比古は靈



男より遅は稜威速ぶると遅速ぶるといふ遅に同じさ  
 れば一物に發れる張の力以て放らしむる物の葦牙成  
 して燃分派れつゝ其母たる天日の成れると賞め且永  
 く其天日と守護り幸へ給ふ意と兼ね尙靈男たる御稜  
 威ある由と稱奉れるなりけり斯て葦牙の如く燃騰れ  
 るものは幾千萬の限も無くわかれ剖判れて遠くも近  
 くも各其位と定めて大地及所有星辰と化りろの跡の  
 本位に残留れる物に天てふ名と存しまた高天原とも  
 稱ひて是即天日なり此御國は宇宙の中心にして造化  
 三靈の神留坐す國天地の諸神人類も死後の幽位と靈

の鎮る國なる故に靈といふ國號あるなり中臣書詞乃  
水天都水遠加氏とある宇都志國は顯國の義なるこ  
と大己貴命の亦名を顯國魂神と作けるを以て知らる  
るが此大地を顯國と云へるは天御國を靈  
 の御魂相感けて靈男神天之常立神坐せり次に皇産  
 靈の御魂相感けて靈女神靈女とは現體を具へ給はざ  
女の尊稱となれると國之常立神坐せり此二柱の神  
と靈男の例の如し  
 名の義常は借字にして所なると大國隆正翁の説に  
 信るべし立は正字にして月の見初る日を月立といふ  
 立に同じ然れば天日は更なり大地列星に至るまで各  
 位と定めて其所に立ちたるを賞め且永く其配置と守











次なる御代に移り男神と角櫛神女神と活櫛神と稱へり御名義本居大人説に凡て物のあづかに生初てたとへば尾頭手足などの分ちは未生ざる形と都奴と云ふ獸の角も此意にて其形を以て云名なるべし櫛は借字にて久毛久牟久美許理など、皆通ひて物の初て芽し生意なりまた物の集り疑る意をも兼たり凡て物は物の集り凝て成るも芽具牟涙具牟をのなればおのづから意は一に通へりどの具牟に同じ今云草木の芽々むを角々むともいひて葦牙を葦角といへるなどは殊にこの神名に能活とは生活動き初る由なりとあるは大率く符へり宜けれど此なる角は神の全體に就て云ふにはあらで御手足などの部々僅に生初めたるを稱へるものなり

されば此神等は御手足と成るべきものかつと角くみて其形の未整はざるもあやとと活動き初め給へる由と男女の神に分負せ奉れるなりけり此御名を一世期として其御代を経る間に又神體の狀變りて次なる御代に移り男神と大斗能地神女神と大斗乃辨神と稱へり此神等の神名の義大は字の如し斗は亦名と大富道神大富邊神とも申奉るに依れば斗牟の省略にして物の具備りととのへると富といふなるべし能は例の之てふ辭なり地は宇麻志阿志訶備比古遲神の遲と同一にして稜威の義辨は米と通ひて雌々しき由なり



然ればこの二神は神體の漸々に大きく成坐せる隨御手  
 足は論ふも更なり外部の器械概畧成々て男神は自然  
 稜威々々しく女神は自然雌々しき御容貌ありてうち  
 視るにも男女の神徳の判然に別れ坐せる状を賛美奉  
 れるなりけり此御名と一世期として其御代と經る間  
 にまた神體の狀變りて次なる御代に移り男神と淤母  
 陀琉神女神と阿夜詞志古泥神と稱へり御名義淤母陀  
 琉は思足なるべし萬葉十卷に霞立長春日乎天地乃  
心呼天地二思足橋云云阿夜は歎辭詞志古は賢の  
るなど思足てふ詞の例なり  
 字義萬葉九卷に古之賢人泥は未思得す強て試に云は  
之遊兼云云とあり

もあら 然れば此二神は頭腦神經などの組織完全く成  
 りりて思量の満足ひ坐して阿夜と驚歎あるはかり  
 賢き由と稱奉れるなりけり此神號と一世期として其  
 御代と經る間にまた神體の狀變りて次なる御代に移  
 り男神と伊邪那岐神女神と伊邪那美神といへり御名  
 義平田大人説に神代紀口訣に伊弉者誘語と云り信に  
 此二柱神適合して國土を生成さむと互に誘ひ催し給  
 へる意にて伊邪之伎伊邪之美と負せ奉しなるべし之  
 と那と云る例あまたあり麻奈子手末などのと言れた  
 るが如し尙男神に岐といひ女神に美と云へる岐は言



の接ける音便に濁れども元伎の清音にして聞の本言  
 美は見の本言なり其は天皇の天下政ち給ふと始め萬  
 事を領知することと聞ずとも見ずともまた其と重ね  
 て聞し見すなども云へる義にしてこれらの語のこと  
 丁又十七丁なごに注され此神等の修理固成の大業と  
 たる説あり参考すべし  
 受持たせると云ひ其を男神女神に別負せ奉るとして  
 は聲を聞くは物を隔て、も爲得らる、より男神の所  
 治す外事の廣き方に稱へ形と見るは物を隔て、爲得  
 べからざるより女神の所治す内事の狭き方に稱へし  
 ものなり比古比賣てふを始り男神を古といひ女神を  
賣といふは此伎の古に通ひ美の賣に通へる

なり又君てふ言も伎と美の美言をされば此男女二神  
 併稱へるにて聞見の義なる事著し  
 は彼成餘れる所成合はざる所即陽元陰元に係る内部  
 の構造美しく熟ひて情欲の動き初るより互に伊邪々々  
 と誘ひ立て、夫婦の道を始め神人の始祖と爲り給ひ  
 て男神は主と外事を掌坐し女神は主と内事を掌坐す  
 由と稱負せ奉れるなりけり紀記の傳に依れば宇比地  
神の趣に所見れど平田大人云宇比地須須比智運より  
神母陀流訶志古泥と云までは決めて伊邪那伊邪那  
美神の御身の漸々成坐る賢き思量に於て前名に負  
世奉れり論れたるは阿夜賢き思量に於て前名に負  
の卓説なりければ今其説に從ひて云へるが其間甚  
萬歳を歴たりけむ傳無ければ知るべからざるも甚  
甚久き年歴なりけむ傳無ければ知るべからざるも甚  
運須比智運神の降誕坐しは一名各一代と定めて五世期



の初に當りて神體の整ひたるが伊邪那岐伊邪那美神なるを以て曉るべしなほ大地のみならず餘の星辰にも其界々の大始祖たる神の天御國に生しけむを其は直接き關係のあらざれば吾古傳には洩しなるべしそも、天之御中主神より豊雲野神までは悉獨神と假の御體を現し其次なる神に觀え給ひて造化の成蹟と神語々傳へてをほその眞理を助坐すべき神功を任しめ給ひつゝ、次々に御體を隠して幽位に神留坐して各靈徳を流行し給へるが天之常立神以前の五靈とば別天神と稱し國之常立神豊雲野神は主と大地列星に關坐せる神徳あれば吾古傳にては國之常立神と神世初代とし豊雲野神と神世二代とし宇比地邇須比智邇

神より伊邪那岐伊邪那美神に至り男女耦坐せる神等とば各二神を合せて一代と定めこれを神世七代と稱すなりさて宇比地邇須比智邇神より以下五代の諸神は異名同神なる故に豊雲野神は伊邪那岐伊邪那美神の御代に至るまで神體を現し居給ひて此男女二神に觀え給ひこの神等の大地球を造り固め給ふべき幽契の豫に定りて御歴代承繼來坐せる天神諸の大勅を以て修理固成是多陀用弊流之國と日ひて天瓊矛を賜ひて託事し給へり天御國は彼一物より分判るものば既く斷離れて漸次に固まり成れぬ神世三代宇比地邇須比智邇神の時植物及牛交威を呼吸し得て殆植物に類せる動物生地で、牛交威



の用に因りて其種族を遺し次に神世の四代角不活全に  
 の時に魚類は尾鱗虫類は肢または翅などの用は因り  
 して其種族を遺し次に動物生五代大斗乃辨神の  
 時に禽獸虫魚の類何れも其形成の用に因りて其種族  
 を遺し次に動物生六代淤陀琉訶志古泥神の時に奇し  
 き特能を具へたる動物生出て此の御代々神の因り  
 て其種族を遺せりと所思たり其此御代々神の因り  
 御名義を推し以て造化の順序如此あるべきことを悟  
 るべし爾に二柱神は天神の勅の隨天浮橋といふ器  
 に乗らして大虚に發途し迢々天降坐して海原を畫給  
 へば宇奈婆其は初眞の義に美省かり之の奈に通るなり宇  
 を水土の分れたる波長は廣き所を稱ふ方  
 に云ひ殘せり波長は廣き所を稱ふ方  
 の導れ去きて許袁呂許袁呂に冷却しまれる時に拔上

給へば其矛鋒より滴瀝る潮自然凝積りて一島と成初  
 めしと自凝島と賞給ひて其島に降坐し天瓊矛を衝立  
 て國中之柱と爲給へり故地熱は此柱を傳ひて放散さ  
 つゝ彌益々に水土の判別れて海と陸とを爲たりけり  
 然れども當時未草木の生立たざりしを以て造宮の原  
 料たるべきもの絶て無ければ二神共に産靈天神の大  
 造化の神徳に擬はむと冥想力を凝らし給ふ時に神異  
 きかも小造化の神功著く先天之御柱と齋給へる中央  
 の柱を造り次に八尋殿と化作給へり此を神語に美多  
 都留といへるは眞作の義にして天然の原素に資らむ



隨意に物體と化現給ふなり常々名大造化小造化の別を  
 不生不滅の本靈及二分靈の天地を組織するは疑ふべからず  
 して其消長盈虚にも一定不變の原則あるは疑ふべからず  
 らざる事實なるを小造化は其大造化の原則に孕ま  
 れたる神等の限有る威徳に得たる所感なればその品  
 物は宇宙有りのものと毫も異なる事無きが如し  
 倏忽に時變幻たるに過きず既く平田大人の書どもに  
 引れたる淳和天皇紀天長九年五月に伊豆國賀茂郡に  
 坐す伊古奈比咩神の宮二院池三處を給へる神宮一院を  
 天皇紀承和七年九月に同國上津島に座す阿波神の  
 宮四院石屋二間屋二間關室八基を給へる神宮一院を  
 紀貞觀七年十二月に駿河國淺間明神の神宮一院を  
 給へるなど歴史に昭々なるものいづれも現體の神業  
 には非れども其理は此なる八尋殿を眞作給へると全  
 小造化の例なりさて二神は此八尋殿に住居て伊邪那  
 岐神は其宇比地邇神と神名負坐せる世期よりその御

身の成々て止に御容姿の稜威々々しきのみならず終  
 に成餘れる處さへあれば女神も其成々れる神體の御  
 容姿柔々しきに類へて殊に柔々しき一處の在りもや  
 せむと怪みて伊邪那美神に汝身者如何成と問給へば  
 伊邪那美神の我身者成々而不成合處一處在と答坐し  
 して以て然れば經緯二大元子の天陽地陰を構成し其  
 氣の相感合する端に萬物と成々化々する運用は至靈  
 至妙なる大造化の神機なるが此理は自然男女の形體  
 に發れて男には成餘れる陽元女には成合はざる陰元  
 と具へたるものなれば今此陽元と陰元に刺塞きて兒



孫と蕃滋すべき術と始めむと情念の萌し發動けるよ  
 り男神は左上に立坐し女神は右下に立坐し天然の定  
 位に從ひ天之御柱と往き廻り遇ひて男女構精し給ひ  
 し此美斗能麻具波比と稱へる美斗は眞止の義に  
 い此奇術に因り眞の止りて見の形體を結ひ成すを  
 て凡て何事にても本居大人の麻の字省りたるに  
 多し具波比は久比阿比にて物を二が一に合を久比阿布  
 と云ふ由委曲に説れたるが如し銘造化育論に蓋造化  
 之理牝牡不具則不能蕃息故天地之生也必具其牝牡  
 草木有之而况於有血氣之類乎由是觀之則凡有血氣  
 者牝牡相感其欲交接即元運之所揮發而極矣故  
 靈之妙用也其欲交接即元運之所揮發而極矣故  
 厚陰陽相感其欲交接即元運之所揮發而極矣故  
 血氣者之大愉快何事有勝合構者故類止人作此念不  
 唯情也即元運之所促其實爲天地構而爲胚胎也  
 因而可察也男女構精而爲胚胎其爲胎而爲胎也

也故人之爲産育總是天工也其人力之所不能哉とあり其生  
 るなど男女遊精の理をいとも珍たかく論はれたり  
 坐せる蛭子の三歳にたりぬれども脚尙立たざりしに  
 依りて二神は天御國に參上り天神の御判斷を伺給へ  
 ば天神は太占てふ貴重き卜術以て造化天神の大御慮  
 と問奉りて女人先言の御過失ありしことの良はぬ因  
 となりて蛭子を産給ふ如き良はぬ果を得給ひし因果  
 の神理を教給へり母登は麻保登の約にして後に現る  
 なり須恵は志留恵の約に合善る所といふ義  
 描き出ると云ふ義なり此理は天之御中主靈の御名奈  
 加の奈即生成變化の行はるべからず故印度に因果  
 の理に洩るゝこと断めてあるべからず故印度に因果  
 報の理を説き支那に福善禍淫を説きり茲に二神は復此  
 西の理學も亦其標準を此に採れり



國土に還降坐して改めて其御柱を周り夫婦唱和の禮  
 と正し給ひて造國の大業を翼坐すべき御子神等と數  
 産給へるが誰もその任國を定め大八島國內の島々と  
 御名代として遠隔き外國に派遣し各經營の事業に勤  
 めしめ給ひ御名代とは御子神等を愛慕坐せる御情の  
 制難ければ其御名をだに近く遣して常に  
 喚奉るべき記念地と次に海川山草木などのことと分  
 掌坐すべき神と産給ひ水陸の物産を増殖して後に獵  
 漁の業を創め樹藝の道を開くべき便を得しめ給ひ次  
 れ天下に君臨すべき神と産まむと曰て天照大神を降  
 誕坐さしめ給ひしが此神は天御國と所治看すに適し

き御性質なれば可以治高天原てふ勅令ありて更に須  
 佐之男命と産給ひて此命に可以治滄海原潮之八百重  
 と詔してこの地球萬邦の大君主と定め給ひ滄海原潮  
 之八百重  
は此國土を總稱ふ古言なりしこと平田大人説ありまた經眞緯眞の高天原成し  
 て鎔造の源を開きしよりさまざまなる變化作用を發  
 せるが其を大別すれば風火金水土の五元と爲り風は  
 空氣の流動き馳せて萬物を生長せしむる性あるを以  
 て氣馳の約加是と稱ひ火は萬物を乾燥して腐敗らし  
 めざる性あるを以て保志の約比と稱ひ金は萬物を結  
 むる根と爲りて強剛からしむる性あるを以て加良彌



の良省りて加禰と稱ひ水は萬物を濕濡らして引しむ  
 る性あるを以て眞濕といへる麻比の約美となりて美  
 豆と稱ひ麻は多加美加牟美の美と同語にして美は空  
る意また強く云ふ意又確かめる意とも土は地球を綴  
なれるが此は強くいふ意の方ならむりて萬物を載する性あるを以て都々里の約都知と稱  
 へるなり此五元の力を假らざれば天神諸の大勅を奏  
 功し得べからざる理風の能く空気を清潔ならしめ或  
を造り金の掘りもし土の堅く海川などを削り海を埋  
め又海を掘りもし土の堅く海川などを削り海を埋と平生に所思し入たる御魂の相通ふ端に風神御名は  
都比古神志那火神御名は火金神御名は金山水神御名は

能は彌都波土神御名は直と産給ひて各其神徳に依りて  
 二神の神功を輔けしめ尙此物どもの用法を世に知ら  
 しめ給へりさて此大地は天神の神勅にも是漂蕩之國  
 と曰ひし如く天日より分生りたる初は五元風火金の  
 混同れる流動體なれば天日の外郭を周回れる餘勢に  
 引かれて更に自體の運動を發しつゝもいまだ其樞軸  
 を定めたる旋轉の規律無くして水月如す漂蕩ひたり  
 しと二神の天降坐し、後地球形の成整ひゆく機に遭  
 ひて其中より燃發る一界あれども元モト小コき母球オキより燃  
 發たる物なれば其剖判るべき勢の最イ乏トくして久ヒく大



地に附着てありける故に界號と都伎と稱ひ後月に字を充たり  
 地球は其月界と下方にして自轉の法則と決め南北の  
 二極を立たりけり如斯月界の生りし處は地球の根底  
 となれば其界を指して根國とも底國とも或は底根  
 之國また根之堅洲國なども稱へり堅洲は片隅の義なり  
ること本居大人云  
れた伊邪那美神故ありて根國に就坐し、お伊邪那  
 岐神も御踪と慕ひて追往坐せるに其國は大地と未斷  
 離れざる儘に締り固りたる地ありて二神の御子神等  
 の外國に渡坐せる中に既く往坐し、神の御裔孫にや  
 ありけむ豫母津神等數多在坐しけり然れどもいまだ

國形の成竟ざる故に地熱は殊に高くして又夜見國と  
も津國とも稱ふ豫母は夜見の轉にて津は之に通ふ助  
辭なり月夜見國とも或は夜之食國とも稱ふ國號のある  
 如く夜之食國の夜は字の如く食は所聞食の食にして  
其國司す月夜見命に係る稱なること本居大人の  
如し大地の爲に日光の遮られて一歳の中に晝と爲る  
 ことは暫にして大概闇夜なればうるさき虫類の蕃殖  
 りて汚穢き醜國なるを驚き恐怖給ひ女神と御問對の  
 ありし時族離不負於族と曰ひて其二神の間に降誕生  
 し、御子神等とば父族母族と分離しめ女神は彼國  
 の神と爲り給ふべく約給ひて男神は復此國に還坐し



けり凡て神も人も産靈天神の大御胤にして平田大人の説に身體識神固より神の産靈の賜物なるに天地の造化に養はれて呼吸動作と爲されば言行心意悉く呼吸と共に天地の神明に應ぜずと云ことなしとある如し故に天地造化の氣耗れたる物に觸るれば身體の氣耗れ身體の氣耗るればまた天地造化の氣耗るゝの理なるを況て天神の御正統たる神代の御祖神等は其縁殊に親しければ形の影と寫し聲の響と發すが如く著明き應驗あるを以て伊邪那岐神は夜見國の造化の氣不足たる汚垢に往き觸れ給ひて自然神體の氣不足ぬ

れば其神體の氣不足の爲に如何なる世の禍事を惹起さむも計り難しと所思して其神體の元氣を回復さむ爲めに筑紫日向の橘小門の櫛原にて回かされて海水に浴給へりこれ禊祓式及衛生法の本縁なり此時御子孫の諸神は何れも父神の還坐しゝと喜給ひて御浴場に來會ひ坐せると天照大神とは曩に二柱神相共に勅し給ひし任高天原に送り上奉り給へり此後須佐之男命は母族に隸屬坐すべき契ありて伊邪那美神の座坐す根國に就坐さむ欲して常に哭泣給ふに因りて御體の氣耗れたるが其應立に呈れ造化の氣不足て食國



天下に大旱の災發り百川の流絶て海原の潮永も乾を  
 むとし草木悉に枯ぬれば父命は大く憂坐して假使汝  
 治此國必多所殘傷故汝可以馭極遠之根國と神勅あり  
 て其御情に任せ給へば世の凶惡も鎮りしを以て伊邪  
 那岐神御親は神功既に畢ぬる由を天御國に復命し給  
 へりこの時天照大神は高天原に昇給ひ須佐之男命は  
 して政を給ふ所寄給はずて修理固成の大業を其事  
 をば誰神にも所寄給はずて修理固成の大業を其事  
 由を復命し給ひしは此神の國り給ふ趣に所聞るに就きて  
 臨の舉をば主と此神の國り給ふ趣に所聞るに就きて  
 長々も伺奉るに天壤無窮の大御位は天下の主たるに生  
 を産まざらぬやと男女二神の思はし疑らせらる間に生  
 坐し二柱の珍御兒ならん立給はむ子の神慮しらるべき  
 理の定れるを以て徐々になん立給はむ子の神慮しらるべき

て一わたり復命し然て須佐之男命は姉命天照大神に  
 給ひしなるべし 御訣を告給はむとして高天原に昇坐し、が天津罪の  
 御荒びありて天照大神も種々の穢物に觸給ひ御體の  
 氣耗れて不平み給ふまに、天石岨に潜居坐し、に  
 依り忽ち造化の氣耗となりて天日も光輝を失ひ六合  
 常闇と爲りにけり故伊邪那岐神亦名高木神を始め伊  
 那岐神高木神の同神なる天地八百萬神の神集々給ひ  
 由は高木神考に云ふべし 神議々給ひて産靈祭の儀式を嚴重に仕奉りて祈禱坐  
 せる至誠に造化天神の感動坐して天照大神を招出し  
 奉る謀略も御意の如く行はれ造化の氣も元に復りて



遍く照明れり産靈祭は造化三神の御靈を齋奉る邦俗なること産土神社考に説明せるを見て  
 知るさて此時の氣耗は須佐之男命の御暴行に起れる  
 と以て諸神は罪を須佐之男命に歸せ千座置戸の祓物を徵りて罪を贖はしめ重き祓式を爲し不可住於天亦不可居於葦原中國宣急適於底根之國と曰ひて逐給ふに依りて此大地までは降坐し、かども其祓式の驗灼然く御心清々しくなり給ふまに、今より永に姉命に別坐すことの然すがに悲く所思看せば姉命に相見給はむとして復高天原に上詣り天照大神に懇懃に御暇白して天降坐し、が姑く此國に淹留り御子五十猛

神等と俱に天御國より持降坐し、八十樹種を播生して彼大旱の時枯れし山々と素の如く青山と成給ひ其他さま々々御功積を建給ひて御曾孫大己貴命の造國の大事に堪給ふべき御器量あることを鑒定め給ひて終に御母許根國に入坐して其國所看す月夜見命と爲り給へり初伊邪那岐伊邪那美二神の修理固成に勤給ひし年歴のいとむいと長かりしことは論ふまでも無ければ其御後裔なる諸神の國の八十國鳴の八十鳴にうまはり榮坐しけむを須佐之男命の御代を経て其次なる大己貴命の御代此御代は高木神の大勅ありて大己貴命少彦名命兄弟と







ば阿良魂とは情の随放け進みて眼耳鼻舌に色聲  
 香味を感するなどの性を有てて魂をいふなり眞の  
 淡ければ魂の交合ふこと鈍く眞の濃ければ魂の交合  
 ふこと鋭く眞の進む度に應ひて無情の草苔樹木より  
 次々に化生て遂に靈禽靈獸と稱ふべきほどの物さへ  
 出来にけれど其魂は單に阿良魂のみにして子孫の繼  
 繼代を重ぬるも智識の進退無く其度を定めたるのみ  
 をらず死れば其身の元眞に還ると共に魂の妙用を失  
 ひ或は他物に依憑きて造化の理を轉り助くる故に  
 其幽位に歸り鎮りて後裔の守護を爲すの徳無きと人  
 は造化天神の殊更に凝し給ふ男徳女徳の御魂相感く

る間に生坐して宇比地邇須比智邇後に伊邪那岐伊邪  
 那美と賛奉る二神に遣れる二魂即阿良魂邇藝魂を足  
 はして生れ繼來るものなれば邇藝魂の邇藝は邇吳は  
和み鎮まりて綿密に思時運の消長教育の盛衰に隨  
應る性を具へたる魂なりひて智識の進もし退もし且和魂荒魂の表裏自在に  
 て互に相制ち相扶るの作用と誤らざる者は顯世には  
 忠孝貞義など褒められ幽世には大元靈の大在坐す本  
 位に復歸りて堅磐に常磐に子孫の福祉を助くべき靈  
 斑にかり二魂の作用を誤る者は現世には不忠不孝不  
 貞不義など貶され幽世には魔鬼の群黨に陥りてうか



れ零丁ふものなりけり凡て靈魂の作用のこといふは所狭ければ其大略を言ふのみ  
 の始祖なることは違あるまじけれど神代の諸神の  
 御體は現今の人體とは大異にして宇比地邇須比智邇  
 神の生坐して伊邪那岐伊邪那美神と爲り給ふ頃まで  
 は天地の眞のいと稚々しきを親和びて成々たる御身  
 なること論無きを其御系統いまだ遠からざる御代は  
 總て初眞の神體に座坐し況て天地發育の氣熾なる期  
 なれば衣を襲ねざるも寒がらず襪がざるも熱がらず  
 飲食を數せざるも渴く事無く飢る事無く神體を傷け

ざる限は疾病に犯され給ふ事無くして天御國に自由  
 に昇降坐し其昇降ともに發着の所は必山頂または高  
 到着坐すこと無く又天降坐すには天浮橋とも天磐船  
 とも云ふ器に駕給ひ昇坐すには乗器を用給はざりし  
 由平田大人の云はれたるは愛き考證なるが其は天地  
 の張引力に關ることにして然爲給は得あらぬ事  
 なるべし當時天地の相去ること未遠からず空氣の排  
 置もこれに準ふべければ今を以て古を論ふは當らぬ  
 説の極なまた鳥獸虫魚と言語ひ交し給へり大已貴命  
 其庶兄弟八十神などの素菟と談給ひ大已貴命に谷蟻  
 及夜見國の鼠の言ひ鳴名雉女の天神の勅を承賜はり  
 降りて天稚日子の門なる杜木の杪に居て言へると天  
 佐具賣の聞きて天稚日子に告たる天宇受賣命の海魚



と追聚めて問へるに魚どもの答へたる海神豊玉毘古  
 命の海魚と召集めて問へるに諸魚の答へたるをほ天  
 稚日子の喪に河雁鷺翠鳥雀鶴一云の傳には鶏鶴の其  
 事に參預りしも言語ふとは無けれど自然然聞ゆるを  
 ど是なり然れども此動物等の言語は眞の言語に非  
 ば其鳴聲または其舉動など如て察給ふ状の恰神と神  
 と言語給ふに似たるを以て此傳へたるもなるべ  
 し又天角命の鳥者鳴音甚悪也天神稚日子に語  
 げ又建角見命の鳥者鳴音甚悪也天神稚日子に語  
 兄磯城弟磯城の鳥者鳴音甚悪也天神稚日子に語  
 しなほ八咫鳥の故事に就て按ふに素戔嗚尊見夜見國の  
 鼠鳴名は雉女咫鳥の建角見命なり事むも知るべか  
 らず其は八咫鳥の建角見命なり事むも知るべか  
 土記も凡鳥の如く傳へられたるを思ふべし或は  
 記とも凡鳥の如く傳へられたるを思ふべし或は

御靈の遊離れて假體と現はれ奇き御功蹟と建給へり  
 伊邪那岐神の御刀に化坐せる伊都之尾羽張神其御涙  
 に化坐せる泣澤女神其御唾に化坐せる速玉之男神其  
 掃坐し、時に化坐せる泉津事解之男神其御杖に化坐  
 せる衝立船戸神其千引石に化坐せる道反大神又天照  
 大神の荒魂大禍津日神和魂大直日神また須佐之男命  
 の速佐須良比賣神又大已貴命の和魂大物主神などは是  
 なり俗に生靈といひて強く思ひ凝らせる事に係りて  
 は其本體の他に假體と現はるゝ事實さへ或は神體と  
 ある由なるを如何で神代の傳を疑はむ或は神體と  
 變へて假に他物と化給へり近江國伊吹山の主神多々



美比古命の八岐大蛇と化給ひ宇武岐比賣命の法吉鳥  
 と化給ひ櫛八玉神の鵜と化給ひ建角見命の八咫鳥と  
 化給へるなど是なり狐の美女と化り狸の僧と化するさへあるを現て尊き神業想像るべし  
 或は遺精の道に依らずして男神女神の神魂相感け  
 て氣化神と生坐せり伊邪那岐伊邪那美二神の造國に  
 勤給ふ間に風神金神水神土神と産給ひ大山祇神野槌  
 神の山野に因りて特別坐せる間に天之狹土神國之狹  
 土神と始め八柱の神等と産給ひ速秋津比古神速秋津  
 比賣神の河海に因りて特別坐せる間に沫那藝神沫那  
 美神と始め八柱の神等と産給へるなど是なり天照大神須佐

之男命の御管の間五男三女神の例とは稍異にして須佐之男  
 も其は此に擧たる諸神の曲玉を物實として五男神を  
 命は天照大神の八坂瓊之曲玉を握劍を物實として  
 産給ひ天照大神は須佐之男命の十握劍を物實とし  
 三女神を産給へるものなれば御魂の直接感合にはあ  
 らず然て御魂の感合のみにて御産の事あるは産靈天  
 神の妙なる御徳に肖坐又其死坐せる時に御屍の部々  
 せる大神事なるべし  
 各神と化給ふ事あり火産靈神の三段に斬られ給ひて  
 其一段は大雷神と化り一段は大山祇神と化り一段は  
 高麗神と化給ひし是なり一傳には五山祇神と化給ひしと云  
 ひ一傳には其御體に入柱の山祇神成坐せる由いへり  
 長き比喩なれども卑き虫類には其身の幾個にも分れ  
 て各一體を爲しつゝ見孫の滋息るものありて其は皆  
 體軀の構造單鈍なる物に限れることなれば此傳を以  
 ても神代の眞性の力は御屍の或一部位は牛馬と化り其  
 し又豊宇氣里賣神の御屍の或一部位は牛馬と化り其他



の部々には五穀の生りし傳われども其は已<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>は御屍<sup>ミミ</sup>が考ありて別に記すべければ此處に加れず

の變化無き時波布里式に依りて復活<sup>サカサマ</sup>り給ふことあり

伊邪那美神の崩坐し、と出雲國と伯耆國との堺なる

比婆山にて波布里奉りしに蘇生<sup>イカリ</sup>給ひし抄四卷調度部

に爾本朝式云齊王行具十二枚和名波また團扇唐令日

團扇方扇扇字知波とありて扇やうのもの波と云る

が其を振りて靈魂を招奉る神術のありしなり葬を波

布里と訓むも此式の遺風なるが故なり又祝てふ職名

も神の御靈を招奉るより出たる言にして同

義なり詳に魂論に辨たるを就て見るべし

大已貴命

の焼石に焼著おれて死給ひ或は大樹の冰目に拷殺さ

れ給ひし時なごも御體の傷こそ藥以て愈もせめ其御

魂と招返給ひしは必波布里の術なる事決し又櫛玉饒

速日命の天降坐せる時天神瑞寶十種を授給ひて若痛

所あらば一二三四五六七八九十と云ひて振へ瑯々

振へ如此爲てば死人も生返らむと教諭給ひしも亦同

神術なりしなご是なり如此初眞の神體は今より想奉

れば殆怪きほどの運動を爲給ひて大國、隆正翁の人は

身に使はるゝを神は靈を本として身を使ひ給ふもの

なりと云れしは然る説にてこれぞ初眞熱眞の差別な

りけ

伊邪那岐伊邪那美神は御祖天神諸の神勅と奉體

し自餘の諸神は又御祖伊邪那岐伊邪那美神の神功と

あな、ひて此大地と修理固成し給ひ彼宇比地邇須比

智邇神の御身の成往く世期と追ひて天御國の植とし



植る物動とし動る物の自然化生し如く漸次に群類の成出る造化の神徳と翼賛け奉りはた其物どもの用法と定めなどしてろの諸神の末胤と生繼がむもの、一日も缺ぐべからざる衣食住に必需たる事物の權輿と開き給ひし間に神は數代の系統と累ねて其現體の性力逞く心は身に制はるゝほどに就り了り群類は天地の眞の淡より濃に轉り粗より精に變り極りて高等種の動物世に現れかつ大地列星の運行軌道は次第に延長く廣濶らにたりゆきつゝ各其天日と距離るゝこと現今も見放る如くに定まり久く此地球に附着たりし

月界も斷離れて其母球を中心にして周轉り初めたるなど此大地のみならず他の星辰にも月の分生たるは多在るべけれど是亦傳ふべき因のなれば傳はらざるなり天も熟しく地も熟しく神人分界の機運到りぬれば天御國の神議を以て當時この國土を經營り成し主領きて大國主神と爲り坐し、大日貴命に命せて其所治る顯政とは皇孫命に避奉らしめ皇孫命には葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮てふ勅教ありて天降坐さしめ給へり故皇孫命の御名を天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命と稱奉れるなり古事記



に國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣流之時云々と傳  
 へたるを神代記第二の一書に古國稚地稚之時譬猶浮膏而  
 漂蕩云々とありて何れ稚を伊志と訓めるは口訣に宇  
 比志也と注はれたる義なりと平田大人も諾はれたる  
 が如く宇比の約伊となれるものにして彼二大元子の  
 初眞は氣體高天原と散在ぎ亘りて宇宙の鴻大なる現  
 象と造成すべき一物と結べる頃までは最稚々しかり  
 けむと其後奇く異しき變化作用を發しつゝ天地發育  
 の氣運と經歷て遂に熟々しく化り完成ひ物有れば必  
 則有る世界とはなりたりけり故國稚地稚の文は茲に

皇孫命と頌奉れる天邇岐志國邇岐志の御名義と前後  
 照應して開闢の神理と窺ふべき本教の骨子なりさて  
 是迄大國主神の帥給ひし諸神は現體を隠して幽位に  
 復歸坐しゝと其御靈等に係る幽事とば此神の和魂大  
 物主神の所治看して永遠に天皇の近き守護神たる大  
 地官と鎮給へり大物主神の御名義大は神功の大なる  
を褒め物本居大人平田大人等の注  
れたる如く邪鬼を阿志伎の能又物識人などいふ物  
と云ひ狂ひ物氣憑物毛能又物識人などいふ物  
同じく神を指せ主と語は稱へしなり時順ひし國神の  
と座坐す物を之の主と稱はしなり時順ひし國神の  
大地は天皇の大宮所義なる由平田大人の説の如く  
に地は猿田毘古神の所度會の地主と爲りて天照大神の  
大宮地を守り給へ幸ふに同一を大地主神とも申せり  
の主と爲り給へ幸ふに同一を大地主神とも申せり



かく初眞の神代即天地發育期を終りて熟眞の人代に  
 移れる後もなほ現體の儘殘坐し、國神等の多在るは  
 皇孫命に扈從ひて天降坐し、天神等の御胤の相混淆  
 りて繼々に蕃榮以來し御裔とる所謂顯見青人草なり  
 けれし顯見は字の如く青は借字にして彼小の義なるべ  
 なるを指して物とせしる言なり種族には人種にして他  
 生とせしる物とせしる言なり種族には人種にして他  
 凡て上古の神祇は御身に出たり度なる由説明されたる  
 尺一丈は天神の祇御長身に於たり度なる由説明されたる  
 は人を閱て辨ふべし動植物の發育の氣燻なるは其時  
 身須佐之命に殺さざりし物に於たり度なる由説明されたる  
 は須佐之命に殺さざりし物に於たり度なる由説明されたる  
 其長は難及杉生たれど松柏の生たりし事記し其  
 るが彼目は赤加賀智の如く度なりしとあむる以て赤加賀智  
 は八赤加賀智の如く度なりしとあむる以て赤加賀智

今其酸に大てし其能は單に赤色の故に營へるのみならず  
 形其大に大てし其能は單に赤色の故に營へるのみならず  
 し其大に大てし其能は單に赤色の故に營へるのみならず  
 漏逃れ給ひし貴命の夜見國に於て其れ給ひし貴命の夜見國  
 と侯に狹みたり返り坐し御妻は入上りて御見命の安所に生れ給ひし  
 木、侯に狹みたり返り坐し御妻は入上りて御見命の安所に生れ給ひし  
 て大なりし心こらびりし御妻は入上りて御見命の安所に生れ給ひし  
 神の夜見國に於て其れ給ひし貴命の夜見國に於て其れ給ひし  
 已貴命の夜見國に於て其れ給ひし貴命の夜見國に於て其れ給ひし  
 は別て大樹とし又も傳へたるを以て其れ給ひし貴命の夜見國  
 佐之命の命放し給ひし野火の難を避て勝れ穴に陥り須  
 て鼠の命放し給ひし野火の難を避て勝れ穴に陥り須  
 爲し鶴の命放し給ひし野火の難を避て勝れ穴に陥り須  
 小男と記されし御祖神の御手候よし漏れし子なりと留めざ  
 ひし如く代索の御尋常の御體に非れり離れむ意を御留めざ  
 比れども神代男の御尋常の御體に非れり離れむ意を御留めざ  
 るを其船に利用ひ給ひし四尺以上の御衣服は推測ひ給ひ



ひし鶴の羽の豊今世の如き小種ならむやなほ鶴  
 は俗に美曾佐々伊といひて鳥類の中にて殊に小鳥な  
 るが其鳥すら如斯れば自餘の鳥の大なること準へて  
 知らるゝなりまた後田里古神の伊勢國阿邪訶にて比  
 真夫貝に手を昨合はされて海水に沈溺給ひし傳さて  
 に依りて貝類の大なりしことを曉るべきなり  
 神代の神等は衣食住の欲望淡泊かりしかば主と後世  
 の顯見青人草の爲めに造國の事業を勵み坐し、が國  
 土の成立し後に生出たる現世人は衣も厚からざれば  
 寒を防かず薄からざれば熱に耐へず飲食も敷せざれ  
 ば飢渴に苦み家屋も構造の良からざれば病を發し命  
 敷と縮ると以て此物ごとと備ふるは身命を保守るべ  
 き急要の務なり然るに衣る物は散れ飲食ふ物は減り

棲息する所は傾き崩れつゝ國土經營の事業と異り其  
 功の成竟ると云ふ期限無ければ吾身の上は更なり子  
 子孫々八十連屬の末とも想像りて生涯專衣食住の爲  
 めに心の限力の盡勞動き勉強むる其端に智識も次々  
 に高く進めるは嬉しく欣悦ばしき極なれども事繁き  
 世の中となりてはいつしか人心のさかしら立て人の  
 靈足たる道をも殊更に講明らめざるべからざること  
 と爲れり皇孫命の降臨を以て神人分界の時と爲るは  
 る運に成れるものなれば判然には論ふべからず如記  
 に運に成れるものなれば判然には論ふべからず如記  
 鞆草不都合命の御代頃迄は分界前の諸神も在坐し  
 て殆神代の状態なるは言ふも更なり神武天皇より以後



の往々所見るは然有るべき理なりけり然れども人の  
 靈足たるは智徳と兼備ふるにあれば其教にも亦此二  
 者と並進むるの方無かるべからず若徳育のみに偏れ  
 ば智識の發達鈍くして萬般の事物皆退歩に退き又智  
 育の一方に傾けば徳義廢れ也きて人悉狡猾になり果  
 るの弊あるを以て天神は惟神てふ大御教を遺給へり  
 惟神とは神道に隨ひて亦自神道有るの謂にして天地  
 開闢の實理天則に基き神代諸神の創始め給ひし萬事  
 萬物を階梯として益造化の秘蘊を究め其幽功を賛け  
 て國家の利益を興しまた造化の大元首たる三靈より

祖兒の間ほど親睦じきものは無く祖たるものは子を  
 恵み孫を愛しみて子孫の爲めに功績を建て此世とま  
 かりては子孫の守護神と鎮りて夜守日守に護り幸は  
 へ其子孫たるものも亦次々に祖となり幽顯に亘りて  
 吾祖志と繼ぎ吾子孫の身と計りつゝ幾千代幾萬代と  
 來歴過く習を思ひておにもおくにも遠御祖歴代の御  
 祖等の御庇蔭と忘却れず其御靈を尊み重しみ丁寧に  
 敬ひ仕奉り其御心を心として君主に寵られては身を  
 立て世間に賞められては名を揚ぐるを惟神の本義を  
 りける讀者幸に本教神理の大要を了悟り惟神の本義



に背おざれば荒和の二魂と具へ足はし萬物の靈五行  
の秀氣たる詮あらむ

本教神理大要 畢

明治十七年十二月三日脱稿

同 廿二年十二月訂正

同 廿四年十月十六日印刷

同 年十月廿二日出版

版權登錄

著述者兼發行者 長門國阿武郡須佐村四百八十八番地 津田常名



印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十六番地 島連太郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十六番地 秀英舍



